

第2節 小学校における「基礎的・汎用的能力」の育成

(1) 小学生期のキャリア発達課題

小学校学習指導要領において、教育活動全体を通して行う生き方の指導や勤労観、職業観の形成等にかかわる内容は、かなり充実したものとなっている。例えば、「第1章総則第5 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」には「2(4)各教科等の指導に当たっては、児童が学習課題や活動を選択したり、自らの将来について考えたりする機会を設けるなど工夫すること」とある。

この趣旨について、小学校学習指導要領解説総則編では「これからの学校教育においては、一層変化が激しくなると予想される社会の中で、児童が主体的に対応し、自分らしい生き方を実現していくことができるように、(中略)小学校において、児童の発達の段階に応じて選択能力を育てたり将来の生き方や進路などを考えたりする指導を工夫することが大切である」と述べている。

小学校では、幼児期においてなされる創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培う指導を踏まえて、児童が自分自身を見つめ、自らの将来について目を向ける機会などを通して、自分のよさや可能性などに気付き、自分らしい生き方を実現していこうとする態度を育成することが重要である。小学校期は、低学年、中学年、高学年と成長が著しく、社会的自立・職業的自立に向けて、その基盤を形成する重要な時期である。そのため児童一人一人の発達に応じて、人、社会、自然、文化とかかわる体験活動を、身近なところから徐々に広げ、丁寧に設定しなければならない。なかでも思春期に入り、自分の将来に目を向け始める高学年段階では、より工夫した実践が必要である。以下、小学校期におけるキャリア発達課題について、低学年・中学年・高学年に分けて具体的に整理しよう。

① 低学年でのキャリア発達課題

低学年では、幼児期の家庭が中心の生活から、「小学校生活に適應させること」がキャリア発達課題として第一に挙げられる。そのためにまず、あいさつや返事をきちんとできるようにすることや、友達と仲良く遊び、助け合うことができるようにすることが重要である。自分の身の回りのことに関心を高め、好きなことを見つけてのびのびと活動するようにしていくことも大切である。

また、係活動や当番活動に取り組ませることによって、自分に割り当てられた仕事や役割の重要性を理解させ、それと同時に、作業や準備や後片付けをしっかりとすることの大切さを学ばせたい。職業観の育成の基礎としては、身近で働く人々に対して興味や関心を持

たせることも重要である。そのために、生活科での「まちたんけん」など、地域の商店等にでかけ、身近で働く人々を直接見学することなどは重要な体験活動となる。

同時に、この年代は自主性の萌芽が出てくるときでもあり、自分のことはできるだけ自分で行おうとする姿勢を育てたい。一方、自分の好きなもの、大切なものを持つようにすることも重要である。

② 中学年でのキャリア発達課題

中学年では、低学年のキャリア発達課題「小学校への適応」から「友達づくりや集団の結束力づくり」への移行が主な課題となってくる。具体的には、自分のよいところを見つけるとともに、友達のよいところも認め、励ましあうような人間関係づくりを心がけたい。日常の学校生活において互いの役割や役割分担の必要性を理解させることも重要である。

また、中学年では、少しずつ自分の将来への関心が芽生えてくるときでもある。日常の生活や学習が将来の生き方と関係することに気付かせ、将来への夢や希望を持って生活ができるようにすることも重要なキャリア発達課題である。

中学年での職業観の育成のために、身近で働く人々への関心から、世の中にはいろいろな職業や生き方があるということを理解させることが必要である。社会科での「お店調べ」などを通して、低学年で行ったお店の見学だけでなく、実際に事業所の人にインタビューをすることによって、いろいろな職業や生き方について、より関心を持たせることが大切である。また、係活動や当番活動に積極的にかわらせ、働くことの楽しさを実感させることも重要な課題である。

③ 高学年でのキャリア発達課題

高学年では、小学校のまとめとして「集団の中での役割の自覚」と「中学校への心の準備」が重要な課題となる。そのために、自分の長所や短所に気付き、自分らしさをしっかりと発揮できるような場を用意したい。小学校高学年としての意欲を大切に、小さい子どもたちの面倒を見るなど異学年集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする姿勢を育てることも大切である。

また、社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さを理解し、仕事における役割や関連性、変化に気付かせたい。同時に、憧れとする職業を持ち、そのために今しなければならぬことを考えさせることも重要な発達課題である。

この段階における職業観の育成のためには、身近な産業や職業の様子やその変化について理解し、自分に必要な情報を探せるようにすることが特に重要である。同時に、実際に事業所や職場見学などを通して、働くことの大切さや大変さを実感させたい。その上でこ

これまで小学校で学んだことや体験したことが、自分の生活や将来の職業と関連があることに気付かせていく必要がある。自分の仕事に対して責任を持ち、自ら見つけた課題を自分の力で解決しようとする姿勢を育てていく。これらの指導を通して、将来の夢や希望を持ち、その実現を目指して努力できる児童を育成していきたい。

(2) 各教科等との関連

小学校学習指導要領解説では、「道徳」「総合的な学習の時間」「特別活動」のそれぞれにおいて、キャリア教育と関連の深い内容が記されている。もともと「道徳」「総合的な学習の時間」「特別活動」は、「生き方を考えさせる」などを中心的な課題の一つとしており、これらの学習活動はキャリア教育を通じてはぐくむ「基礎的・汎用的能力」を身に付けさせる上で、極めて重要な役割を果たすものである。

また、平成23年1月にとりまとめられた中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」は、「各教科・科目等における取組は、単独の活動だけでは効果的な教育活動にはならず、取組の一つ一つについて、その内容を振り返り、相互の関係を把握したり、それを適切に結び付けたりしながら、より深い理解へと導くような取組も併せて必要である」と指摘しているが、そのための重要な役割が「道徳」「総合的な学習の時間」「特別活動」に期待されているのである。

これを前提として、以下では各教科の学習指導要領解説をもとに、「基礎的・汎用的能力」を構成する4つの能力別に、教科とそれぞれの能力の関係を例示する。なお、以下の引用及びその説明はあくまで例示であり、各学校においては児童・地域等の実態に合わせた能力の育成方策を考えていかなければならないことを改めて付け加えておきたい。

【人間関係形成・社会形成能力】

【例】社会（第2章第1節 1(1)社会生活についての理解, (3)公民的資質の基礎 pp. 10-12)

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

(小学校学習指導要領 第2章 第2節社会 第1目標)

(1) 社会生活についての理解

社会生活についての理解とは、人々が相互に様々なかかわりを持ちながら生活を営んでいることを理解するとともに、自らが社会生活に適応し、地域社会や国家の発展に貢献しようとする態度を育てることを目指すものである。(中略)

(3) 公民的資質の基礎

公民的資質は、平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力であると考えられる。

人間関係形成・社会形成能力は、人が社会とのかかわりの中で生活し、仕事をしていく上で基礎となる能力である。社会科の学習を通して社会生活についての理解深め、公民的資質の基礎を養うことは、この能力を身に付けさせることにも大きく貢献するものである。上に引用した例に限らず、社会科においてはキャリア教育とのかかわりの深い内容が数多い。

【例】音楽（第3章第3節 第5学年及び第6学年の目標と内容 1目標 p. 51）

1目標(1)創造的に音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。

（小学校学習指導要領 第2章 第6節音楽 第2各学年の目標及び内容 [第5学年及び第6学年]）

(1)は、児童が創造的に音楽にかかわり、音楽活動に対する意欲を高め、音楽経験を生活に生かす態度と習慣を育てることについて示したものである。高学年の児童は、論理的な思考力が高まると同時に、美へのあこがれや探求心も高まってくる。また、社会性の発達に伴い、集団の中で協力し合って一つのものをつくり上げたり、友達の表現のよさを認めたりすることができるようになる。

価値観の多様化が進む現代社会においては、様々な他者を認めつつ、他者と協働していく力が必要である。その意味で、音楽の授業において多くの友達と共に合唱や合奏、音楽づくりを行い、協力して一つのものを作り上げることは児童にとって有用な経験となる。特に高学年の児童にとっては、社会性が一層発達するときでもあり、音楽活動を通して、友達のよさを理解する力（認める力）、他者に働きかける力などを高めていきたい。

【例】図画工作（第2章第2節 1(3) [共通事項] の内容 pp. 12-13）

児童は、材料に触れて形の感じや質感をとらえたり、材料を見つめながら色の変化に気付いたりするなど、直観的に対象の特徴をとらえている。同時に対象や自分の行為などに対して自分なりのイメージをもっている。そしてこれらを基に発想や構想、創造的な技能、鑑賞などの能力を働かせて、具体的な活動を行っている。このような、形や色などの特徴をとらえたり、イメージをもったりする能力は、表現及び鑑賞の活動の基になるとともに、対象からの情報を的確にとらえ、それを主体的に判断するコミュニケーション能力の基盤となるものであり、この内容を〔共通事項〕とした。

図画工作の〔共通事項〕は、表現及び鑑賞の活動の中で、共通に働いている資質や能力であり、児童の活動を具体的にとらえ、造形的な創造活動の基礎的な能力を培うための視点として新たに加わった事項である。自分の感覚や活動を基に、形や色などの造形的な特徴をとらえること、様々な事物や事象について自分なりのイメージを持つことなどは、形や色、イメージなどを言葉のように使いながら生活や社会と豊にかかわるコミュニケーション能力の基盤としても極めて重要である。

【自己理解・自己管理能力】

【例】理科（第2章第1節 理科の目標 pp. 7-8）

○ 見通しをもって観察、実験などを行うこと

児童が見通しをもつことにより、予想や仮説と観察、実験の結果の一致、不一致が明確になる。両者が一致した場合には、児童は予想や仮説を確認したことになる。一方、

両者が一致しない場合には、児童は予想や仮説を振り返り、それらを見直し、再検討を加えることになる。いずれの場合でも、予想や仮説の妥当性を検討したという意味において意義があり、価値があるものである。このような過程を通して、児童は自らの考えを絶えず見直し、検討する態度を身に付けることになると考えられる。

「自己理解・自己管理能力」は自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。上記のように理科において、意欲的な観察・実験の活動を行うことは、その結果においても自らの活動の結果としての認識を持つことになる。つまり、児童自らの意欲的な観察・実験は、児童の主体的な問題解決の活動となり、これは自己理解・自己管理能力を養うための貴重な機会となりうるのである。

【例】体育（第2章第2節 2(1)オ ボール運動系 pp.17-18）

ボール運動の学習指導では、互いに協力し、役割を分担して練習を行い、型に応じた技能を身に付けてゲームをしたり、ルールや学習の場を工夫したりすることが学習の中心となる。また、ルールやマナーを守り、仲間とゲームの楽しさや喜びを共有することができるようにすることが大切である。

現在のように変化の激しい社会にあっては、多様な他者との協力や協働が強く求められている。そこでは、自らの思考や感情を律する力や自らを律する力がますます重要となっている。例えば、上記のようにボール運動などを通して、自己の役割の大切さを理解し、行動することはキャリア形成や人間関係形成における基盤となることからである。

【課題対応能力】

【例】国語（第1章3 (2)学習過程の明確化 p.7）

自ら学び、課題を解決していく能力の育成を重視し、指導事項については学習過程を明確化した。例えば、「書くこと」では、書くことの課題を決める指導事項や、書いたものを交流する指導事項などを新設し、学習過程全体が分かるように内容を構成している。「読むこと」では、音読や解釈、自分の考えの形成及び交流、目的に応じた読書という学習過程を示している。

「課題対応能力」は、仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。このことは、上記のように今回の学習指導要領の改訂においても重要視されていることである。国語においては、学習過程を明確化することにより、自ら学び、課題を解決する能力の育成を重視するとしている。

【例】算数（第2章第1節 1(4)算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさに気付く p.21）

例えば、算数を日常の事象と結び付ける活動、ものづくりをするなどの作業的な活動、実際の数や量の大きさを確かめたりするなどの体験的な活動、九九表に潜むきまりを発見するなどの探究的な活動、解決した問題からの新しい問題づくりなどの発展的な活動等々を通して、児童が活動の楽しさに気付くことをねらいとしている。

算数においては、単に知識や技術を学ぶだけでなく、体験的な学習を通して学んだことを実際の生活の中で生かしたり、計算のきまりを自ら発見したりする学習は特に重要であ

る。これは、将来仕事をする上で、様々な課題を発見・分析し、それを処理し、解決することができる能力の基礎となると考えられる。

【キャリアプランニング能力】

【例】生活（第3章第2節 生活科の内容 p. 29-30）

1 内容(4)公共物や公共施設を利用し、身の回りにはみんなを使うものがあることやそれを支えている人々がいることなどが分かり、それらを大切にし、安全に気を付けて正しく利用することができるようにする。(小学校学習指導要領 第2章 第5節生活 第2各学年の目標及び内容 [第1学年及び第2学年])

この内容では、公共物や公共施設を支えている人々がいることが分かるようにすることも求めている。支えている人々とは、公共物や公共施設で職員として働く人はもとより、例えば、図書館で図書の読み聞かせをしてくれる人や、博物館などで案内をしてくれるボランティアの人なども含めて考えていくようにする。大切なことは、それらの人々と直接かかわり、親しみをもてるようにすることであり、その気持ちが公共物や公共施設を大切にしようとする意識へと高まることである。例えば、繰り返し公園を利用する中で、公園を管理している方とあいさつをしたり会話を交わしたりして親しくなる。一方で、掃除などの管理作業の大変さにも気付くようになる。そのことが「公園を大切にしよう」「公園をきれいに使おう」とする意識として高まるようになる。このことは、みんなを使うものは、自分にとっても、相手にとっても気持ちよく利用して生活するものであるという公共の意識の高まりにつながることを意味する。

キャリアプランニング能力は、社会人・職業人として生活していくために生涯にわたって必要となる能力である。小学校低学年時に、身近な公共施設等を支えてくれている人たちの存在に気付かせ、そのような人たちの活動の一端を理解させることは、社会が人によって支えられているという事実を認識させるための重要な契機となる。このような学習を通して、子どもたち自身も将来そうした社会の一員となる存在であることを、実感を伴って理解させることが重要であろう。

【例】家庭（第2章第3節 D身近な消費生活と環境 p. 50）

ア 物や金銭の大切さに気付き、計画的な使い方を考えること。

ここでは、自分の生活とかかわらせて具体的に学習することにより、物や金銭の大切さを実感し、限りある物や金銭を生かして使う必要性や方法を知り、計画的な使い方を考えることができるようにする。

「物や金銭の大切さに気付き」については、家庭で扱う金銭は家族が働くことによって得られた限りあるものであり、物や金銭が自分と家族の生活を支えていることから、それらを有効に使うことの重要性に気付くようにする。

「物や金銭の計画的な使い方を考える」については、児童が衣食住などの生活で使う身近な物に着目し、日常生活の中で有効に活用できているか、使い方に問題はないか、購入した物は自分の生活にとって必要かどうかなどを考えるようにする。

「キャリアプランニング能力」は、「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえることが重要である。この学習では、物や金銭の大切さを児童に実感させ、特に家庭で扱う金銭は家族が「働く」ことによってようやく得られたものであることを十分に理解させたい。その上で、限られたその金銭を無駄なく有効に使うことの重要性に気付かせていく。そして、やがては生きていくために自分も「働く」ことが必要になっていくことを認識させる機会とする。

(3) 地域や学校及び児童の特徴などに応じた実践例

基礎的・汎用的能力の具体的内容については「仕事に就くこと」に焦点を当て、実際の行動として表れるという観点から、上記の4つの能力に整理されている。これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるかは、学校や子どもたちの実態によって異なる。そこで、この4つの能力を参考しながら、各学校の課題にあった具体的な能力を設定し、そのニーズにあった取組が大切である。そのためのヒントとして以下の事例を活用してほしい。

① A小学校の事例—特別活動を中心にした自尊感情を高めるための取組—

<p>《地域の状況》 都市部の私鉄駅周辺で昔ながらの地元の商店や住宅が混在する地域にある学校である。創立80年を迎え伝統があり、3代続けて本校に通っているという家庭も珍しくない。 また、地元の町会組織及び商店組合がしっかりとしており、学校の活動に協力的である。保護者も教育に対して大変熱心であり、PTA活動も活発である。一方、熱心さのあまり時に学校に対する苦情となって表れることもある。</p>	<p>《学校概要》 児童数310人、学級数11クラス、専科及び算数少人数加配教員を含めて教員数17人の小規模校。近隣の中学校と連携し、小中学校が連携した教育活動を進めている。 《学校の教育目標》 しっかり学習する子……………〔知〕 人に対してやさしい子……………〔徳〕 元気でねばり強い子……………〔体〕</p>
---	--



<p>《キャリア教育目標》 ・自尊感情を持ち、将来への夢や希望を大切にしながら意欲的に生活する 《目指す児童像》 ・体験活動を通して「やればできる」という自信を持って行動する児童 ・集団の中で自分の役割を自覚し、責任を主体的に果たす児童 《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》</p>			
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対能力	キャリアプランニング能力
<ul style="list-style-type: none"> あいさつや返事、応答の仕方など基本的な生活習慣の確立。 遊びや集団生活を通してきまりを守ることや協力する大切さを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な体験的な活動を通して「やればできる」という自信と自己肯定感を持つ。 集団の中で我慢をしなければならない場を経験する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自ら課題を見つけ、それを達成する喜びを知る。 学校行事等を児童自らの手で企画し、協力し合いながら実行する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の役割や責任を果たし、人の役に立つ喜びを実感する。 友達と協力しあって仕事をするにより集団の多様性を理解する。



《キャリア教育の目標》《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》などの設定の背景と経緯

- 本校は、家庭や地域の教育力の高さもあり、全国学力・学習状況調査では常に高い成績を残すなど、学習面では一定の成果をあげている。
- その一方、生活面では、全校の集まりで私語が目立ち、クラスによっては仲間はずれがあるなど生活指導面での課題がある。また、落ち着いて授業に取り組めない児童がクラスに数名おり、学級崩壊の前兆がみられる状況もある。
- このような現状について、キャリア教育推進委員会（校長、教頭、教務主任、キャリア教育主任、各学年主任によって構成）において原案を作成し、年度末の職員会議で3回にわたって次年度のキャリア教育の目標について協議した。その結果、全校で「自尊感情を高めるための取組」を、特別活動を中心にして行うこととした。

<p>《実践例一特別活動：学校行事や地域・PTAとの連携》 全校での集まりでの私語や、クラスでの仲間はずれなど、周りへの思いやりに欠ける行動は、認めてもらえる経験が少なく、そのことによる自信の欠如から起こるものではないかと考えた【*1】。そこで、特別活動、主に学校行事において、児童の自主性を大切にしたい実践を行い、子どもたち自身に「やればできる」と自信を持たせ、自尊感情を高めることとした【*2】。 各学年の児童数が少ないこともあり、主な学校行事はできるだけ学年単独でなく、低学年団（1,2年）中学年団（3,4年）高学年団（5,6年）の複数学年で実施することにした【*3】。このことにより、特に上の学年の児童は自ずと下の学年の児童の面倒をみることになり、これらの活動により、一人一人に自信を持たせ、自ら行動できる児童を育成したいと考えた。 また、学校独自の自己理解調査を発達の段階にあわせて作成し、適時その調査を行うことで児童の自己理解状況の変化を知ることとした【*4】。</p> <p>◎春の遠足 全校を、低・中・高の3つの学年団に分け、春の遠足はそれぞれの発達の段階に合わせた目的地に行った【*4】。低学年では、入学したばかりの1年生に対して2年生が張り切ってお世話をするなど上級生になった自覚と自信を持たせることができた。また、高学年ではグループ行動を運動会でのグループと同一にすることにより【*5】、より人間関係を深めることができた【*7】。</p> <p>◎運動会 「表現」の種目は全て学年団ごとに実施することにした。練習を通して、上学年の子どもたちの運動会への意識が高まった。特に、6年生にとっては、5年生をよく指導し、終了後には多くの子どもたちが涙を流すほどの達成感を持つことができ、「やればできる」という自信にもなった。運動会直後の自己理解調査では明確に自尊感情を高めた児童の割合が高くなった【*4】。</p> <p>◎秋の地域親子運動会 PTAと地域町会に依頼し、秋の親子運動会においても、子どもたちが主体的に活動できる係活動等を用意してもらった【*8】。準備の段階から、担当の児童が地域の方と直接かかわることのできる貴重な体験をした。また、当日も子どもたちは高学年の児童を中心に良く働き、その姿を地域の方から誉められ、大きな充実感を味わった。</p> <p>◎卒業式 これまでの一年間の総まとめとして、6年生だけでなく全校で卒業式に向けての準備に取り組むこととした【*5】。特に、4年生以上では実行委員会を組織し、計画段階から子ども自身に考えさせ自分たちで卒業式を作っていくという意識を持たせた。当日は、教師の細かな援助があり、大きな達成感をもって終えることができた。地域からも大きな評価を得られたが、「あのような卒業生になりたい」と下級生が実感したことが何よりも成果であり【*9】、自己理解調査でも顕著な変容がみられた【*4】。</p>	<p>《特に注目すべき点》 【*1】学校や児童の実態から、その課題解決のための具体策を、キャリア発達の観点から検討した。 【*2】基礎的・汎用的能力のうち、「自己理解・自己管理能力」の育成に重点をおいた。 【*3】学校の規模等、学校の実態に合わせた具体的で実践的な取組を考えた。 【*4】キャリア教育の実践の評価を、具体的な数値で表す工夫をした。 【*5】キャリア教育を特定の学年だけで行うのではなく、全校的な取組として成果をあげようとしている。 【*6】一つの取組で完結させず、他の行事等とも関連させよう工夫している。 【*7】基礎的・汎用的能力の4つの能力のうち、当初考えた能力の育成だけにかかわらず、他の能力も同時に育成しようとしている。 【*8】キャリア教育の目標達成のための取組を学校だけで行おうとしない。趣旨を丁寧に説明し、地域等の協力を得ている。 【*9】キャリア教育の成果を単年度で完結するのではなく、常に次年度への意識をもった取組にしている。</p>
--	--

《本実践例から得られる示唆—他校への応用にあたって—》

本実践事例は、児童の実態から基礎的・汎用的能力の4つの能力のうち「自己理解・自己管理能力」に分類される「自尊感情の育成」を中心としたものであるが、「人間関係形成・社会形成能力」や「課題対応能力」の育成にも配慮した取組となっている。

また、学校や児童の実態によっては、活動のポイントを絞ることも考えられるが、この事例では全教育活動と関連させつつ「特別活動」の「学校行事」に焦点を当てている点が特質となっている。

② B小学校の事例

—教科学習をつなぎながら、コミュニケーション力を高めるための取組—

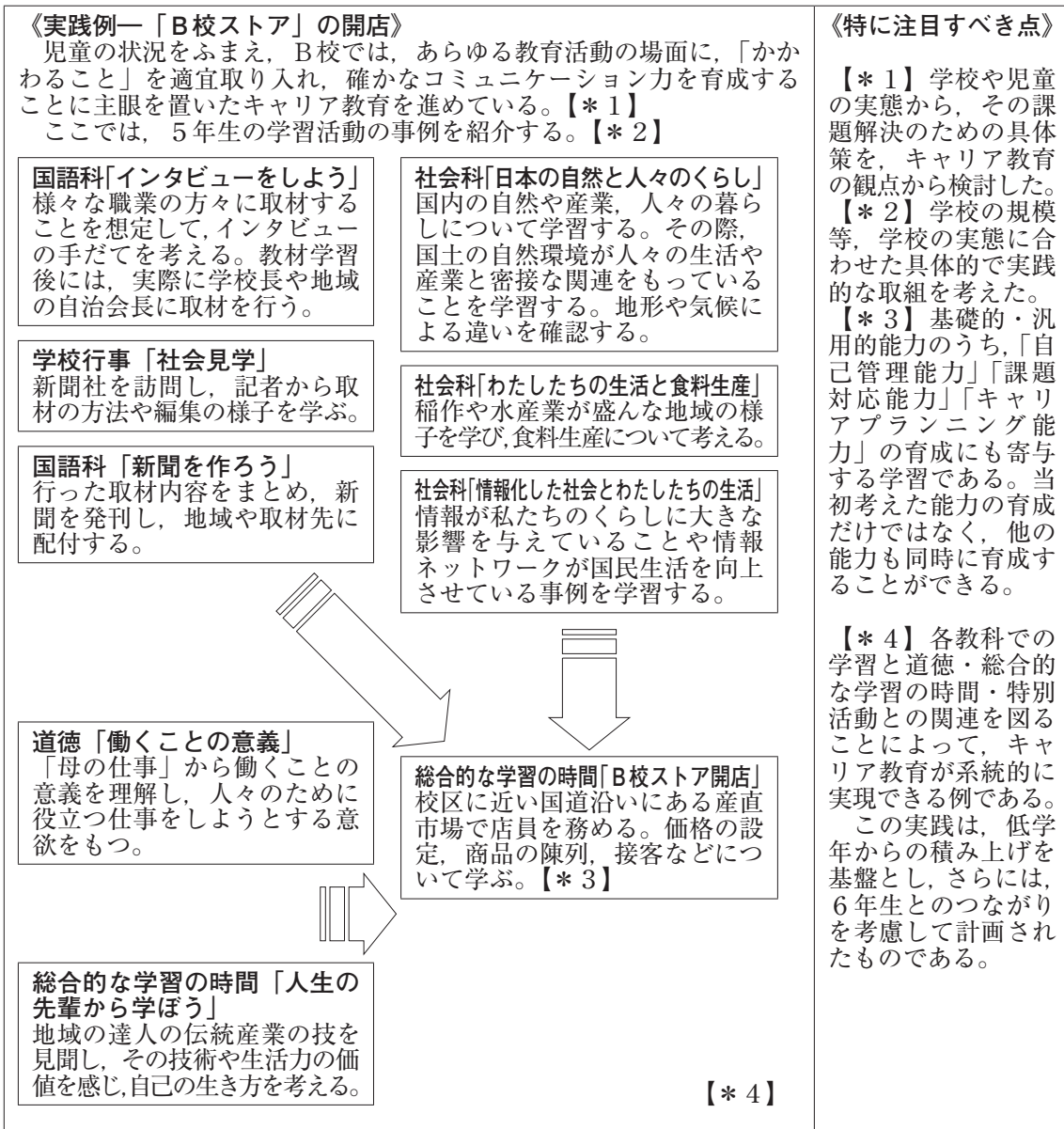
<p>《地域の状況》 昭和50年代、大都市のベッドタウンとして生まれ変わった地域である。周辺は宅地であるため、木々を人工的に植え、整備された公園等があるものの、自然林や田畑はほとんど見受けられない。 居住する家庭は、ほとんどが若い父母、そして児童、乳幼児といった家族構成であり、自治会組織もなかなか調いにくい状況にある。保護者の教育熱は高く、学校への期待感も大きい。一方で、利己的な苦情が学校に届くこともある。 子どもたちは、学校と家庭以外に社会とのかわりが少なく、社会的な視野の狭さや円滑な人間関係の構築が保ちにくいといった課題をもち、忍耐力にも弱さが見られる。そこで、特に、確かなコミュニケーション力を身に付け、社会性を培っていくことが重要である。</p>	<p>《学校概要》 創立25年という新しい歴史を築いてきた学校である。 世代の幅が狭い地域にあるため、児童数は開校当時より減少傾向にある。 平成22年度現在、児童数850名、学級数30学級、教員数40名の大規模校である。児童は卒業後、校区の中学校、中高一貫教育の私立中学校数校、県立中学校へ進学し、進路先が多岐にわたる。</p> <p>《学校の教育目標》 しっかり動き、じっくり学び、みんなで育つ</p>
--	--



<p>《キャリア教育目標》 ・自らの夢をはぐくみ、かかわりを大切にしながら、自分の可能性を伸ばす。 《目指す児童像》 ・夢やあこがれを抱き、将来に向かって意欲的に生活しようとする児童 ・集団の中で自分の役割を自覚し、自己有用感をもちながら責任を果たす児童 ・周りの仲間と好ましい関係を保ち、円滑なコミュニケーションを築く児童 《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》</p>			
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
<ul style="list-style-type: none"> ・遊びや集団生活を通して、きまりを守ることや協力する大切さを知る。 ・教え合ったり励まし合ったりしながら仲間と協力して仕事に取り組む。 ・社会人としての自覚を醸成し、多様な個性や環境を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間の中で、自分らしさを発揮しながら行動する。 ・集団行動の中で自己規制を行いながら、目標達成に向けて粘り強く取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら課題を見つけ、それを達成する喜びを知る。 ・学校行事などを児童自らの手で企画し、協力し合いながら実行する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の役割や責任を果たし、人の役に立つ喜びを実感する。 ・将来の夢や希望、あこがれを持ち、そのために今何をすべきかを考える。



《キャリア教育の目標》《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》などの設定の背景と経緯
 ・学力への関心の高い保護者が多い反面、家庭の教育力にばらつきが見られ、基礎学力の定着していない児童も多く、学力差が顕著である。
 ・取り巻く社会を反映するかのように、異年齢間での遊びや活動がほとんど行われていない。また、何事にも目標をもって積極的に取り組む姿勢や将来設計への意欲などの醸成が必要である。
 ・このような現状を踏まえ、本校にふさわしいキャリア教育として、6学年すべてにわたり、その発達の段階に応じたキャリア教育の必要性を職員間で合意し、教科学習や地域の特色を有効に活用しながら、体系的に進めていくこととした。



《本実践例から得られる示唆—他校への応用にあたって—》

この実践例は、学校や児童の実態に即して、基礎的・汎用的能力について整理された4つの能力のうち「人間関係形成・社会形成能力」を中心に据えた取組の例である。もちろん、他の3つの能力にも配慮し、それぞれを高める工夫が見られる。

ところで、小学校教育のあらゆる場面には、キャリア教育として活用できる多くの教育活動がある。各教科や道徳、外国語活動、特別活動、総合的な学習の時間それぞれの特性を生かしながら、多様な機会を計画的に活用して展開していかねばならない。

ところが、小学校段階でのキャリア教育の見えにくさゆえに、その全体計画や年間指導計画を作成しても、実際には、日常の教育活動の積み重ねにすぎず、計画としては意識化されていても、現実には日常の中に埋没してしまうことが起こりうるのではないだろうか。

この実践事例は、そういったそれぞれの教育活動の中に実は組み入れられているキャリア教育の断片的な一コマ一コマをつなぎ、児童のキャリア発達を促す教育活動として指導者が意識したひとつの取組である。学級担任が児童の学習活動全体を見渡しやすい小学校教育だからこそ、全教員がキャリア教育の視点を意識しながら実践を行うことの有用性を実感するものである。

③ C小学校の事例－交流活動を核とした社会性を高めるための取組－

<p>《地域の状況》 地方山間部の豊かな自然に囲まれた地域である。近年の過疎化・少子化の影響により、世帯数に比して子どもの数が激減している状況がある。それだけに、地域の方々の子どもや学校への関心度も高い。 子どもたちは、ほとんど、祖父母と同居、あるいは日常的に会うことのできる距離に住んでいる。そのため、家庭教育で身に付き躰や高齢者とのコミュニケーション力は備わり、素直に育っている。 一方で、安定した環境であるだけに、子どもの育ちが小さな閉鎖的な社会でのものとなりがちであるため、特に、自尊感情を基盤としながら他者理解を進め、社会性や課題対応へのたくましさなどを身に付けることが重要である。</p>	<p>《学校概要》 創立135年を経た伝統ある学校である。 児童数の減少により、平成15年度から複式教育を余儀なくされ、平成22年度は児童数29人、学級数4クラス、非常勤（専科）を含めて教員数9人の極小規模校となっている。児童は、卒業後、近隣の2小学校の児童とともに、校区の中学校へ進学する者が大半である。</p> <p>《学校の教育目標》 かしこく やさしく たくましく ・自ら学び、創意工夫する子 ・やさしく思いやりがある子 ・たくましくがんばりぬく子</p>
---	--



<p>《キャリア教育目標》 ・自らを発揮し、将来への夢や希望を大切にしながら意欲的に生活する。</p> <p>《目指す児童像》 ・体験活動を通して「やればできる」という自信をもって行動する児童 ・未来に夢をもち、臆することなく自らを発揮できる児童 ・集団の中で自分の役割を自覚し、責任を主体的に果たす児童 ・他者を理解し、円滑なコミュニケーションを築く児童</p> <p>《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》</p>			
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
<ul style="list-style-type: none"> あいさつや返事、応答の仕方など、対人関係に合わせた言葉遣いができる。 開かれた他者との関係の中で適切なコミュニケーションがとれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な体験的な活動を通して「やればできる」という自信と自己有用感を持つ。 集団行動の中で自己規制ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自ら課題を見つけ、それを達成する喜びを知る。 学校行事などに意欲的に参画し、創意工夫した企画・運営ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の役割や責任を果たし、人の役に立つ喜びを実感する。 将来の夢やあこがれを大切に、それに向かって意欲的に生活する。



《キャリア教育の目標》《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》などの設定の背景と経緯

- ・本校は、総じて落ち着いた家庭環境に生まれ、規範意識や道徳性も高い児童たちである。
- ・異年齢での遊びや高齢者など異世代間の交流も多く、伝統的に異学年の関係性が良好である。
- ・一方で、小規模校での生活を続ける児童たちにとって、今後より大きな社会に踏み出したときにも、ものおじせず自尊感情をもって社会生活を営むたくましさや課題への対応力を培うことが非常に重要である。児童や保護者のアンケート調査からも、これからの自分に自信のなさを感じとれる回答が読みとれることなどからも、本校にふさわしいキャリア教育を体系的に進めていく必要がある。
- ・このような現状をふまえ、年度末の職員会議で次年度のキャリア教育の目標について協議し、その達成のための体系的な取組のひとつとして、体験活動を核として実践を重ねていくこととした。

<p>《実践例一高学年 特別活動『『集い』を創る』》</p> <p>小さな閉じられた環境で生活し、経験もどうしても限られている中では、自信を持って何事にも向かえる気力や自己有用感をなかなか持ち得ないという現状も否めない【*1】。そこで、校内に「祭り」という集いの場を設定し、事前の学習指導の場面や特別活動において、交流による体験活動を意図的に取り入れることによって、達成感や成就感を具体的に味わわせながら、たくましく課題に対応して企画・実行する力を高めることとした【*2】。また、活動は全て縦割りによる年齢集団（3班編制）で実施した【*3】。</p> <p>◎『集い』までに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・春の遠足（1～6年生 県立図書館【*4】、城郭公園など） （全校児童で同じ目的地を選定する。なお、学習の目的を発達段階に応じて学年別に設定し、集団の中での役割や責任感を養うこととした。） ・宿泊体験学習（3～6年生 県南部の漁村にて【*5】） （民泊による体験学習。初めて出会う人とのコミュニケーションを通して社会性を獲得しながら、様々な体験活動に挑戦した。） ・運動会（1～6年生） （「子どもが創る運動会」を合い言葉にし、保護者や地域の方々にも理解を促しながら【*6】、基本的には児童会を中心として児童が召集、進行、準備を行い、紅白のブロック対抗により演技や競技に取り組むこととして実施した。また、この中で取り組んだ「ソーラン」は今やC小の名物となり、様々な場面でリクエストをいただき、児童の自尊感情を高めることにもつながっている。） ・他校との交流活動（都市にある大規模校の児童、特別支援学校児童） （地元農家の協力により、農業体験を行う中で、立場や環境の違う児童との交流を行った。児童の視野の広がり、他者理解を進めることにつながっている。） <p>◎「C校まつり」</p> <p>児童の手で作った3体の御輿が運動場を練り歩き、太鼓の踊りや笛太鼓の演奏を披露し、地域の方や保護者に参観してもらう。なお、この踊りや笛太鼓は、6年生が下級生に教えるといった練習を繰り返す【*7】。そのため、5年生は来年度のために懸命に覚えようと努力していた。</p> <p>他に、輪投げなどのゲーム活動を展開し、下級生や保育園児、地域の方々を楽しませる。また、低学年児が育てたサツマイモを焼き、皆で味わう。児童は、主体性や企画力を養いながら、人の役に立つ喜びを実感し、充実感を味わうことができた。</p> <p>◎『集い』のあとに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山遊び （事前学習としての教科学習、そして、ロープワークの講習後、高学年児童の準備したそり遊びやブランコ、ターザンごっこを実施した【*8】。） ・カレーの日 （お世話になっている地域の方々に招待状を送り、5年生が家庭科の学習で調理したカレーを会食した。なお、6年生が中心になって地域の方々をもてなす。） 	<p>《特に注目すべき点》</p> <p>【*1】学校や児童のこうした実態から、その課題解決のための具体策を、キャリア発達の観点から検討した。</p> <p>【*2】基礎的・汎用的能力のうち、「課題対応能力」の育成を核とした。</p> <p>【*3】一つの取組で完結させず、教育活動全般において関連させることに意味がある。</p> <p>【*4】例えば、当地方の図書館では、子どもを対象とした図書館ウォッチングにより、書庫の見学や司書体験ができる。こういった地域の事業をうまく活用するのも効果的である。</p> <p>【*5】この取組は、「豊かな体験活動推進事業」の中で実施した。</p> <p>【*6】キャリア教育の目標達成のための取組として運動会をとらえるとともに、その達成を学校だけで行わず、地域や保護者の協力を得ている。</p> <p>【*7】単年度で完結するのではなく、常に次年度への意識をもった取組にしている。</p> <p>【*8】地域の豊かな自然をふるさと教材として活用している。また、事前学習では、地域人材を積極的に活用している。</p>
--	--

《本実践例から得られる示唆—他校への応用にあたって—》

児童の実態を職員間で十分共有した上での全校的な実践の例である。ただし、特別活動における学校行事の本質についての理解が不十分な場合、それらは一過性の行事となってしまう、教員の多忙感だけが募る結果も招きかねない。そうした課題を克服するためには、その活動を日常の活動（日々の授業や学級経営等）とどう有機的につなぐのかという点に留意する必要がある。本事例では体験活動を意義やねらいの確認につながる教科指導が必ず前後に行われていることを付記したい。

なお、体験の希薄さや狭小な生活環境といった課題は、極小規模校に限定されるものではない。本実践例は、そういった課題に対応し、教育効果を得られる取組であるため、各校の状況に合わせ、単学年の実践として設定したり、学校環境の特色をうまく活用したりしながら、小学校における体験活動の意味をキャリア教育の重要な視点として押さえ、系統的に取り組んでいってほしい。